THE TIFFANY FOUNDATION AWARD

# ティファニー財団賞の輝き

## ——日本の伝統文化と現代社会——

# ごあいさつ

2007 年に開始されたティファニー財団賞は、ティファニー財団と日本国際交流センターの共同事業として実施されたユニークな表彰制度でした。

この事業は、米国を中心に世界各地で芸術分野等において助成活動を実施するティファニー財団と、グローバルな課題に対して世界との対話を進める日本国際交流センターとのコラボレーションとして実施され、ティファニー財団としても日本における初めての本格的な活動でした。

日本の伝統文化の振興と地域社会の活性化に功績のあった団体を顕彰するという本事業は、全国的に注目され、毎年各地の様々な団体からご応募をいただくとともに、メディアでもたびたびとりあげていただきました。少子高齢化によって地域社会の衰退が懸念される中で、伝統文化に光を当てることで地域の活性化に寄与するという試みはまさに時宜を得たものであったといえるでしょう。

本書はこれまでティファニー財団賞を受賞した 12 団体の活動とそれぞれ受賞による成果をまとめたものです。われわれはこの事業を通じて、日本の地域社会には素晴らしい伝統文化が息づいていること、また伝統の火を消さずに地域全体で盛り立てていこうという人々の熱い思いに感銘を受けました。こうした活動が全国各地で展開されていることを誇らしく感じるとともに、改めて敬意を表したいと思います。

ティファニー財団賞は 2013 年をもって終了いたしましたが、受賞団体の活動、また全国各地の伝統文化に関する活動は続いていきます。ささやかながら本書が全国の地域社会で活躍する皆様の活動を社会に広める一助となることを望んでおります。

公益財団法人　日本国際交流センター
理事長　　大河原　昭夫

# Introduction/Foreword

The Tiffany Foundation Award for the Preservation of Japanese Traditional Arts and Culture in Contemporary Society was a unique program launched in 2007 under the joint operation of The Tiffany & Co. Foundation and the Japan Center for International Exchange.

It was a collaboration between two organizations: one based in the U.S. and actively promoting artistic endeavors throughout the world and the other engaged in dialogues on global issues with various international partners. It was the very first time for The Tiffany & Co. Foundation to operate extensively in Japan.

The award recognized organizations that made notable contributions to the promotion of Japanese traditional culture and to the revitalization of local communities. Every year, many organizations sought for nomination from various parts of Japan. The media also followed with great interest. The program turned out to be timely in highlighting traditional culture that could contribute to invigorating communities at the brink of decline in the face of low birth rate and aging population.



This publication contains the activities of the twelve recipients of the Tiffany Foundation Award and what they were able to achieve. It shows the wealth of traditional culture that continues to exist in various communities and the dedication of those who give their best to keep it going. That there is so much of such heritage throughout Japan has been a great revelation and a source of pride and inspiration. I was deeply touched by the passion of those who have committed themselves to passing the torch and would like to pay my greatest respect to their work.

The program itself was concluded in 2013, but the activities of the recipient organizations and of others involved in preserving the traditional culture continue throughout Japan. I hope this publication will serve as an encouragement as well as a means to make their efforts more broadly known to the public.

Akio Okawara
President and CEO
Japan Center for International Exchange

# ティファニー財団賞を振り返って

森美術館館長　南條史生

ティファニー財団賞は、日本の伝統文化を継承しつつ、それを現代において発展継承させているユニークな試みを顕彰するという使命を負って、当時ティファニー日本支社長であったマイケル・クリスト氏とティファニー財団の発案で始まったものである。そして、この賞は内容だけでなく、デザイン的にも優れた要素を持っていなければならない。知名度もあがった第５回目、６回目の回には、自選他薦の６０件を超える応募が集まるほどになった。

日本の伝統を大事にし、またそれを現代に活かしていこうという試みは、日本中に多数あることは想像に難くない。一方それを評価しようというこのような賞は、日本に沢山ありそうで、実はない。その意味でこの賞が果たした役割は大きかった。多くの場合、それは日本のクラフト技術の再興、街並みの保全・創出、伝統芸能の継承と再興につながっている。

私としてはこのような意義のある賞の選考委員長を務めたことは、大変に光栄なことであった。日本の文化は世界に誇る独自の歴史と内容を持っている。そして、また美的な表現が大きな役割を果たしていることも、重要な事実である。今回、６回にわたり開催されたこの賞を振り返る出版物ができたことは喜ばしいことだ。これを機会に是非、多くの人たちに、日本の文化について再考し、またその未来の道を開くことを考えていただきたいと思う。

## My Reflections on the Tiffany Foundation Award

The unique program to recognize the importance of preserving and promoting traditional Japanese culture in our present day world was first introduced by Michael C. Christ, the then president of Tiffany & Co. Japan, and The Tiffany & Co. Foundation. The creation of the Tiffany Foundation Award for the Preservation of Japanese Traditional Arts and Culture in Contemporary Society sought not only to give recognition to the excellence in content of the activities but also to that in design. As the program became more widely known, the nomination list rose to over 60 organizations in its fifth and sixth years.

It is not hard to imagine the existence of an overwhelming number of organizations working to preserve traditional Japanese heritage and find application for it in contemporary society. And it would seem equally appropriate to have many programs to appreciate such efforts. However, there is none to date in the latter category. Hence the huge impact this award program had in recognizing such efforts. The Tiffany Foundation Award, in fact, contributed to help restore traditional skilled craftsmanship, preserve and/or recreate historic quarters of an old town, and revive as well as promote traditional arts.

It was a great honor for me to serve as the chairman of the selection committee for such a meaningful and valuable award program. Japan has much to be proud of in having a long history of unique culture. It also excels in aesthetic expression. I am happy to introduce you to some aspects of this rich culture in this publication that reflects on the six times the program awarded recognition. I hope this will be an entry point for many people to revisit the Japanese cultural heritage and think of ways to pave the way for its future.

Fumio Nanjo
Director
Mori Art Museum

# 受賞団体

第１回伝統文化大賞

# 美濃和紙あかりアート展実行委員会

岐阜県美濃市

*Mino Washi Akari Art Contest and Exhibition Organizing Committee*

美濃和紙あかりアート展は、1300 年の歴史を有する伝統産業である「美濃和紙」の再生と重要伝統的建造物群保存地区である「うだつの上がる町並み」の活性化・ブランド化を目的として開催している。美濃和紙を使用したあかりのオブジェを一般・小中学生の両部門で全国公募し「うだつの上がる町並み」に屋外展示し、審査を行っている。

美濃和紙あかりアート展実行委員会は、20 ～ 60 歳代のボランティアで構成されている。役割に応じた小委員会（総務、会場、イベント、審査、交通・作品チェック等）を組織し、小委員会で検討された企画を、実行委員会（全体会議）で諮りながら運営をすべて取り仕切っている。

作品の搬入・搬出は原則として、出展者が 1 日目に自分の作品を持参し、受付を行う。2 日目の終了後に出展者が作品を撤収している。出展者が美濃市に 2 日間滞在することで、美濃とのつながりが生まれている。アート展当日は、出展者や全国各地から約 10 万人の来場者でにぎわう。

作品の展示は、「うだつのあがる町並み」の自治会や住民の全面的な協力により、2 日間会場内の道路を通行止めにして、町並み全体を展示会場としている。1 日目の展示終了後は、各家に作品の保管をお願いし、2 日目の朝に引き取り、再度展示する。

審査は、古川秀昭氏、堀木エリ子氏、日比野克彦氏をはじめとした一流の審査員によって厳正に行われている。大賞は無論のこと、各々の審査員名を冠したライトアップ賞を受賞された皆さんは、著名な審査員に自分の作品が認められたことに喜びを感じ、賞の重みやその価値も非常に大きく、メジャー級である。あかりアート展の作品審査の公平性やレベルの高さは、この一流の審査員により確保されている。

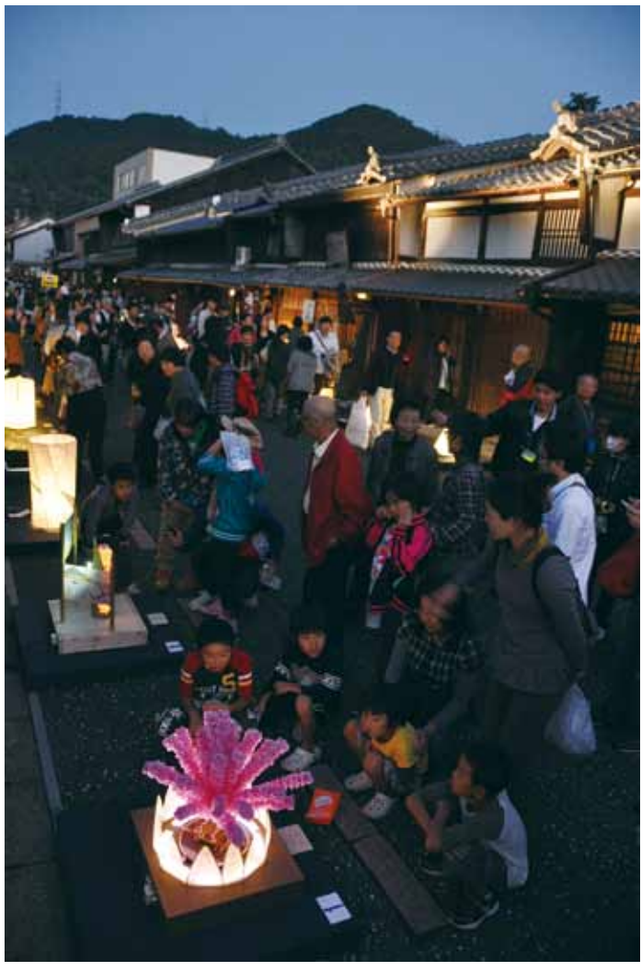
アート展開催に伴うイベントは、街角コンサート、美濃手漉き和紙き、休憩コーナーの設置などがある。美濃市の特産品、土産品を扱った臨時売店での販売や、市の伝統芸能「美濃流し仁輪加」の上演など、地域に根差したさまざまなイベントが自主的に開催されている。

江戸時代の情緒を残す町並みの中でやさしくともる数百点の美濃和紙のあかりオブジェたちは、美濃和紙の持つ柔らかさや美しさ、そして美濃和紙の新たな可能性を感じさせてくれる。

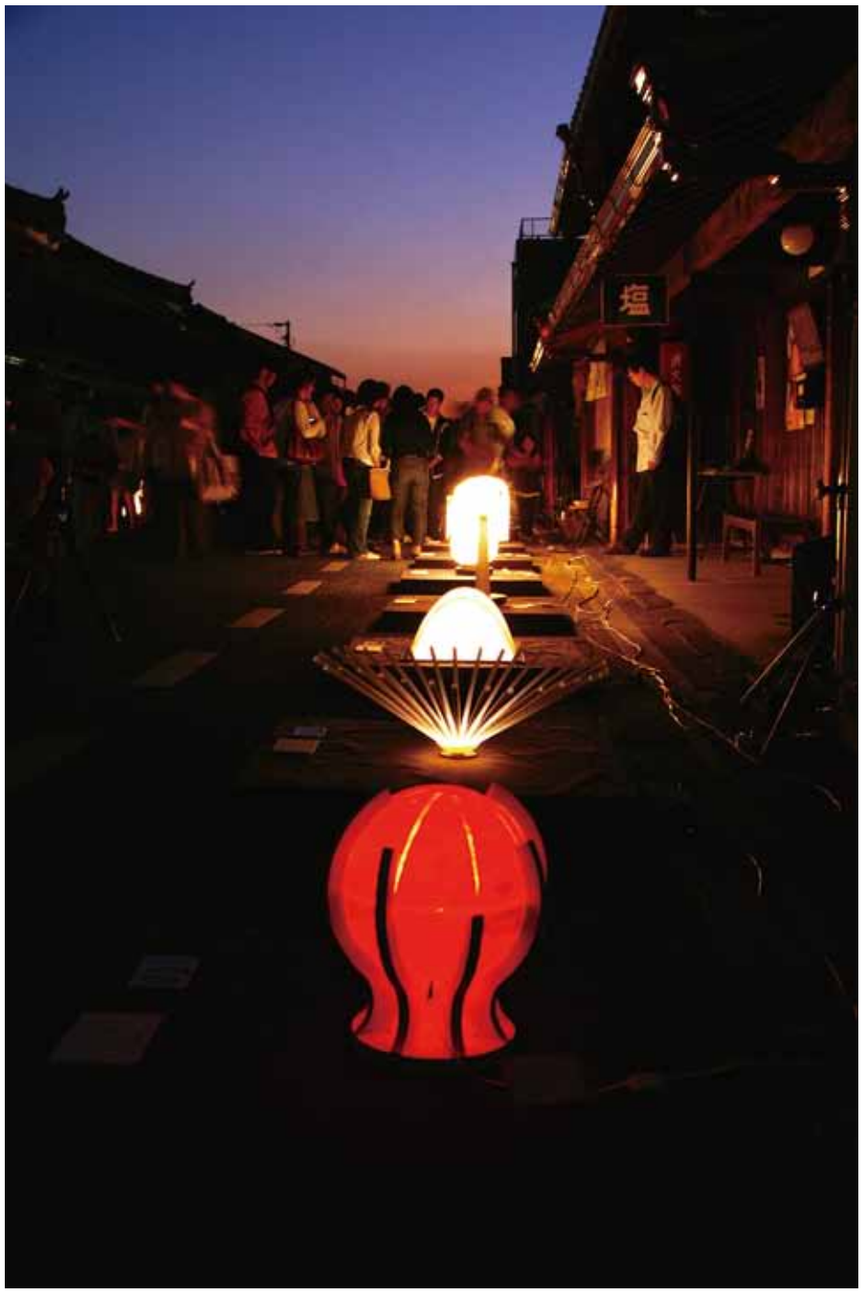
For 1300 years, the Mino region has specialized in the production of *washi*, a traditional handmade paper, and it is now one of the three remaining major centers of papermaking in Japan. Mino *washi* is made from the bark of mulberry trees, and it is known for its durability and smoothness as well as its high quality. During the Edo Period (1603–1868), Mino became prosperous through the production of *washi*, which is used for a wide range of traditional objects such as lanterns, fans, scrolls, umbrellas, and *shoji* doors. At the time, there were about 5,000 *washi* production houses in Mino, however, they began to face competition from machine-made Western paper in the 19th Century, and today only 30 workshops remain. With population of only 25,000, Mino gives some the impression of a small rural city that has been left behind by the modern era but in recent years, the city's residents have sought to revitalize the *mino washi* tradition.

One activity that is carried out in order to promote the use of *mino washi* is the Mino Paper "Akari Art" Exhibition (*Akari* means "light"). *Mino washi* has long been utilized to make traditional paper lanterns because of the distinctive soft glow that it allows to emanate through, and it was used to create the paper lanterns that inspired Isamu Noguchi's famous "Akari" light sculptures when he visited the region in the 1950s.

During the Akari Art Exhibition, the town invites artisans from around the country to create light sculptures with *mino washi*, and these delicate creations are then judged on their artistic beauty. Mino boasts several streets lined with the traditional "*udatsu* style" homes that were common in the Edo Period, and the exhibition entries are lined up along these picturesque streets and illuminated for night-time viewing. The exhibition, which is held every year in mid-October, has gained a nationwide reputation and it attracts crowds of visitors from around the country.



ティファニー財団賞
伝統文化大賞受賞記念祝賀会




## 成長するあかりと共に

美濃和紙あかりアート展実行委員会
実行委員長　井上　哲也

美濃和紙あかりアート展は平成20年6月、ティファニー財団賞伝統文化大賞をいただきました。記念すべき初の受賞で、事務局から手紙が届いたときは、実行委員一同驚くとともに、今までの努力が一気に報われる思いで、感激もひとしおでした。

何より嬉しかったのは、この賞がイベントとしての「美濃和紙あかりアート展」そのものだけでなく、裏方を支える「実行委員会」にも光を当ててくれたことです。実行委員会は全てボランティアで運営されています。500人以上の出展者と10万人を超える来場者を、おもてなしの心でお迎えするために、当日の細かなスケジュールやサブイベントなどについて、意見を交わしながら、1年かけて準備をしています。そんな地道な活動が受賞を通じ認められたことで、私たちは「美濃市の活性化の一助となっている」というふるさとへの誇りを強めることができました。

20年続いてきたこのアート展は、さまざまな苦労や失敗を乗り越えながら実行委員や市民の皆様とともに成長してきました。そんな、ささやかながらたくましいあかりを見つめながら、私たちはアート展への思いを深め、継続の大切さを改めて知りました。これからも美濃市発展のため、賞に恥じることのないよう日々邁進していきたいです。

第１回伝統文化大賞

# 西塩子の回り舞台保存会

茨城県常陸大宮市

*Nishi-shiogo Revolving Theater Preservation Committee*

「西塩子の回り舞台」（1999 年茨城県有形民俗文化財指定）は、江戸時代後期の道具も残る回り舞台付きの組立式農村舞台。床材と舞台道具を保持し、柱や屋根材とする材木や竹は芝居実施ごとに山から伐り出して舞台を組立てるもので、半世紀もの間、地元での使用がなく、常陸大宮市西塩子地区の倉に保存されてきた。

1991 年に大宮町（当時）が行った調査によって貴重な文化財であることが判明したことがきっかけとなり、70 ほどの地区の全戸が会員となって、1994 年、舞台の保存と組立てを目的とする保存会が結成された。

当初、すでに組立て技術が絶えていた舞台の復活は、費用の手当てや人手の問題、組立てが可能であるかなどマイナス要因ばかりが議論されて実現は困難とみられた。しかし3年間、保存会内部で舞台復活の意義を考えるとともに、同じような舞台を持ち、地芝居を行っている各地の人々と交流するうち、舞台の復活は目的ではなく、自分や子どもたちが誇れるふるさと作りの手段であり、舞台は祖先が遺してくれた貴重な財産と意見が一致、1997 年、半世紀ぶりの舞台復元にこぎつけた。

舞台の組立ては、屋根材とする真竹 300 本余の伐り出しから始まり、丸太を柱等として間口 6 間、花道の長さ 6 間の舞台を建ち上げてゆくもので、完成には約 1 か月を要する。翌 1998 年に行なった復活記念公演には、自ら組立てた自慢の舞台に立ちたいと結成した地芝居一座「西若座」の歌舞伎上演も果たした。

その後、地元小学校に働きかけて子ども歌舞伎も開始。3 年に一度程度の割合で、東日本大震災後の 2013 年までに、7 回の組立てと地芝居公演を行って、毎回 3000 ～ 5000 人の観客を動員するなど、伝統文化を現代に活かした活動を展開している。

舞台復活当時より 70 程であった地区の戸数は、ここ 10 数年の間に 60 戸にまで減少、地元小学校も統合によって廃され、少子高齢化が深刻化している。
早くから西塩子地区のみでの保存・継承の困難は予想されており、積極的に、組立て、役者、衣裳・舞台道具作り、広報など多種多様なボランティアの募集を行ってきたことが実を結び、農業体験など他方面での交流に広がるなど、地域活性化に大きな役割を果たしている。

*Kabuki*, one of Japan's most famous and distinctive traditional forms of theater, originated in the early 17th Century, and quickly spread through out the country. Village style *kabuki* theaters were built in the countryside, and while many of these were permanent constructions, some were temporarily built on farmland when local people invited performers from other towns and were dismantled after several performances. Nishi-shiogo's *mawari butai*, or "revolving theater," is said to be one of the oldest theaters of this type.

The majority of these theaters were destroyed or disappeared during and after World War II but, in 1997, after a half-century of no performances, the tradition of temporarily building a village style *kabuki* theater, was revived in Nishi-shiogo and a company specializing in the local form of *kabuki* was formed. Local craftsmen and volunteers constructed a large theater using traditional techniques and materials, and utilizing specialized stage parts that had been stored away since the last temporary theater was dismantled decades earlier. The theater, which measures 20 meters wide and stands 7 meters tall, was constructed out of lumber with 300 bamboo poles for the arched roof, following the techniques that have been used in Nishi-shiogo for the past two centuries.

Every three years since, more than 100 local residents have taken part in the month long process of rebuilding the theater for a series of performances. This is done according to the historic specifications and using traditional techniques. (An 1820 book has been discovered with records of the tools used for the construction of this theater.) It is built with a revolving stage, which can be set for several scenes and rotates to allow the scenes to change in the view of the audience. Portions of the stage have been preserved over the years and are used each time the stage is built, including impressive traditional carvings on the platform for the musicians, decorated sliding doors or *fusuma*, and large ornate stage curtain. The way in which local residents replaced the elaborate curtain that had been used since the 1820s with a new one in 2006 demonstrates the meticulous care and attention to detail that goes into this. They began by growing cotton for the curtain, then they weaved this by hand using traditional techniques and arranging for it to be dyed and decorated in the traditional manner, a process that took five years.

In addition to staging performances, the committee works to preserve the tradition of local kabuki by teaching local school children *kabuki*, and by involving large number of volunteers from the town's high school as well as area college students in the process of building the theater and staging the performances.

## 受賞によって拡がった世界

常陸大宮市歴史民俗資料館副参事　石井　聖子

保存会設立当時の私たちの願いは、「先祖が遺してくれた組立式舞台を使って、私たち自身が誇りと自信を取り戻す」という、切実ながら内向的なものでした。ですから、舞台を組み立て、歌舞伎を上演するだけで手一杯なこともあり、多くの方に興味を持っていただき、ご来場いただく手立てを講じることは二の次にしてのスタートでした。

しかし、当日おいで下さった満場の観客に胸を熱くした私たちは、私たちの思いに心を寄せ応援してくださる方々の存在に気付き、力づけられました。

2007 年の暮れ、届いた漆黒の封筒に、我々には縁遠い「ティファニー」の文字を認めた時の意外な驚きは忘れられません。ましてや、第 1 回ティファニー財団伝統文化振興賞をいただいたことは、私たちのささやかな活動が、私たちの思いもよらない分野や地域の皆様からも応援いただいているのだと、視野が一気に拡がったように感じられました。

一見美徳とも見える「謙遜」のもとに、私たちは自分たちの文化や伝統を卑下しがちです。しかし、私たちは、ティファニー財団賞に「世界に対しても胸を張れ」と背中を押していただきました。昨年度 HP で公開した、英語版「西塩子の回り舞台」解説もその表れのひとつです。

私たちに様々な意味で勇気を下さったことに、心より感謝申し上げます。

第２回伝統文化大賞

# アース・セレブレーション実行委員会

新潟県佐渡市

*Earth Celebration Committee*

アース・セレブレーション実行委員会は、新潟県佐渡島で 1988 年より毎年開催している国際芸術祭「アース・セレブレーション（EC）」を運営している実行委員会で、佐渡市と鼓童文化財団がその中核を担っている。また、鼓童文化財団の母体となる太鼓芸能集団「鼓童」は、佐渡を拠点に国際的な演奏活動も行っており、日本の伝統文化としての太鼓や今日的な芸能の魅力を、世界 44 か国以上の国々で紹介してきた。

EC は、鼓童が世界各地で知り合ったアーティストを佐渡にお招きし、本拠地である佐渡で、魅力ある文化発信をしていきたいと考えて始めたものである。今では、佐渡汽船、新潟交通佐渡、佐渡テレビ、佐渡観光協会などの地域の組織と連携し、多くの人々のサポートを得て、本年で 27 回目を迎える。

過去 2 回を除いて 8 月に開催しており、鼓童の拠点である佐渡市小木地区を中心に、3 日間の開催期間中に野外コンサート、シンポジウム、ワークショップ、展示、マーケットなど様々な催しを行う。これまでアイルランド、アメリカ合衆国、イギリス、インドネシア、ガーナ、韓国、スペイン、セネガル、中国、ブラジル、ブルンジなど 26 か国から、また日本国内からも、伝統芸能の担い手や優れたアーティストの方を招聘してきた。

開催当初からのテーマは、人間にとって根源的な行為「たたく」であり、文化や国籍の違いを超えて、さまざまな人々が交流し合い、佐渡という独特な歴史と文化をもつ場所で、その豊かな自然と調和しながら、地球に生きる喜びを讃え合う場を築いてきた。また、未知の文化や世界に出会うだけでなく、私たちの暮らす佐渡や日本で培われてきた文化や伝統を広く世界に紹介し続けてきた。

開催当初から、EC には日本国内のみならず、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア、遠くはアフリカから、多くの外国人来場者が訪れてきた。アーティスト、スタッフ、来場者など、数十を超える国籍からなる人々が、美しい自然の中で、芸術を通じて一つになれる場を創り出してきた。

今後も、日本の芸能、それを育む地域の魅力を伝えながら、世界中の新たな文化に出会い、人々がいろいろな違いを超えて、解り合い、喜びを分かち合える場を継続して提供していきたい。

"Earth Celebration" is an international performing arts festival hosted by Kodo, a local *taiko* drum troupe, and Sado City. Despite its rich history and natural beauty, the island of Sado in the Japan Sea—like many rural communities in Japan—suffers from a declining and aging population and a shrinking economy. The festival was first organized in 1988 to revitalize the community, which had limited opportunities for international exchanges. In recent years, the festival has grown into an international music event that attracts large crowds of people from other parts of Japan and from around the world.

With a theme of celebrating humans and the environment, the festival is known for spontaneity and creativity in its performances. Various music and cultural programs, including outside concerts, *taiko* workshops, island tours, and cultural exhibitions, are held on the island throughout the three-day event. The festival seeks to create an alternative "global culture" and "local culture" through collaboration and synergy among the musicians and performers invited from around the world. According to the *New York Times*, Earth Celebration has become one of the "most advanced world music events in Japan."

Filled
with
Flowers

## 人類に共通する思いを新たに

アース・セレブレーション実行委員会
実行委員長　島崎　信

ティファニー財団賞伝統文化大賞に選出いただき、誠にありがとうございました。私共が継続して行ってきた事業が、二十年を迎えた節目に、このように名誉ある賞に選ばれ、評価されたことは大きな励みとなり、受賞後も六年間、「アース・セレブレーション」を開催することができました。あらためて御礼申し上げます。

この受賞を機に、当団体が掲げてきた「文化や国籍の違いを超え、様々な人々が交流し合い、芸術を通じて自然と調和し、地球に生きる喜びを讃え合う」というテーマが、高く評価されたと再認識しました。私共の思いが人類に共通する願いであることを信じて、継続して参りました。同時に、その使命を果たすために、地域社会で育まれてきた芸能や、日本独特の音楽や文化が、大きな役割を果たしていることに対しても、高く評価いただいたと受け止めております。

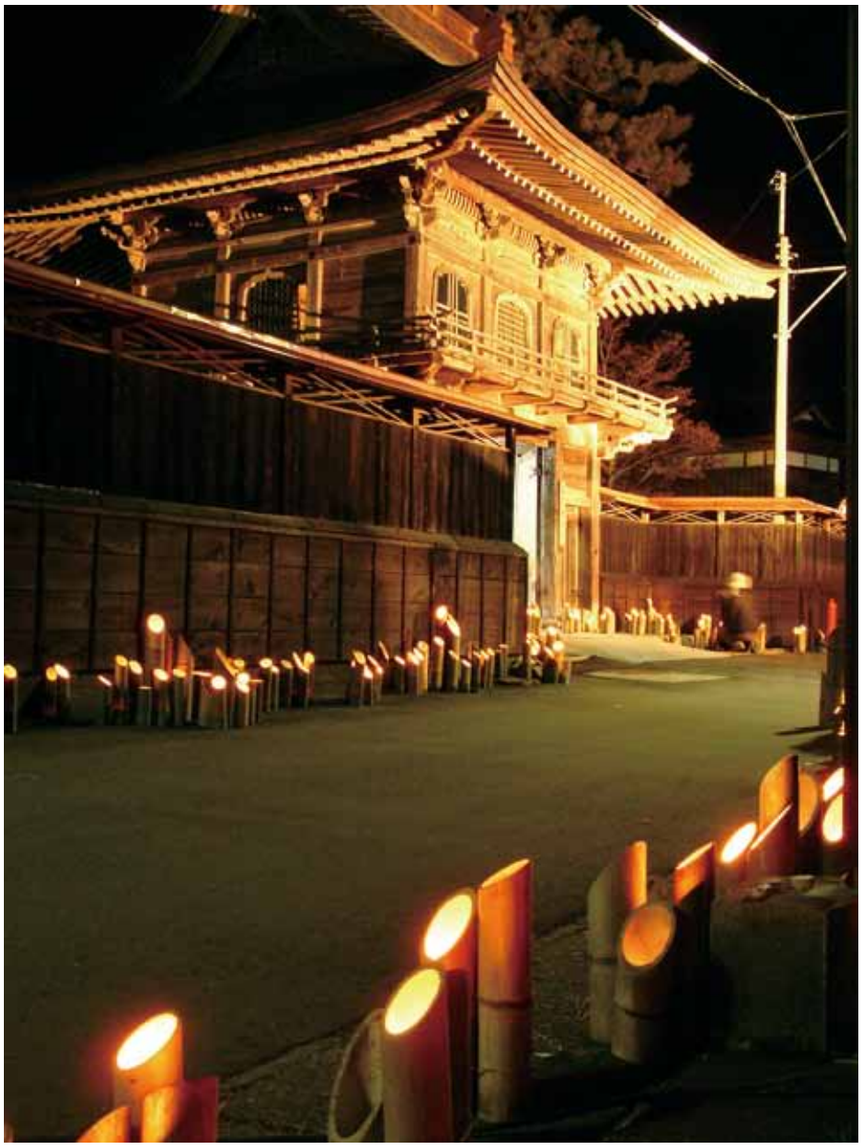
今後も、佐渡や鼓童が培ってきた芸能や文化という財産を、同時代に活力を与える人類共通の財産として、多くの方々と共有し、事業を継続していく気持ちを新たにしております。次の節目である三十年を目指し、内容の充実をはかり、グローバル化の進む現代社会に必要とされる多文化共生の重要性を本事業の開催を通じて提唱してまいりたいと存じます。

第２回伝統文化大賞

# チーム黒塀プロジェクト

新潟県村上市

*Kurobei Project Team*



城下町村上の寺町に続く安善小路は、かつて松尾芭蕉が歩いた通りであり、重要文化財のお寺や古民家、風情ある割烹等が歴史を感じさせる通りである。しかしこれらを取り囲む塀のほとんどはありきたりのブロック塀で、せっかくの景観が阻害されていた。

もしこの小路が昔ながらの黒塀になったら非常に素晴らしい小路になると、2002 年に住民でチーム黒塀プロジェクトが結成された。「わが町は我々市民の力で良くしていく」との志で、行政に頼らず、城下町村上のあるべき姿を市民自ら形にして示すのだと活動を開始した。資金はゼロからのスタート。

知恵を絞り「黒塀一枚千円運動」を展開し広く市民から寄付を募り、資金を捻出。それを基金とし黒塀作りを行うのだが、既存のブロック塀を壊さず、その上から板を打ち付け、黒ペンキを塗り、昔ながらの城下町らしい黒塀にするという奇想天外な工法で黒塀づくりが行われた。少ない経費で景観は大きく変る。作業は大工に全て任せるのではなく、子供からお年寄りまで市民が集まり、釘打ちとペンキ塗りを行い、市民の気持ちのこもった黒塀になる。正に民間パワーの景観づくりである。

1000 名を超える市民からの寄付で、この黒塀つくりは現在 420 mに達した。景観づくりなどのハード事業は行政で無ければできないという意識が一般的な中、市民でも知恵と工夫で景観づくりはできるということを示した事業である。2008 年にはより美しい小路にしようと植樹による緑化を進める「緑 3 倍計画」も開始された。松、ヒバ、もみじなど約 60 本の緑が植えられ、黒塀の小路は黒と緑のコントラストで非常に美しい小路になった。そして現在、小路を歩く来訪者が非常に増え、村上を代表するスポットとして地域活性化に大きく貢献している。

この黒塀の通りで始めた「宵の竹灯篭まつり」は、5000 本もの竹で作った竹灯籠に灯りをともし、小路のお寺のお堂、古民家の座敷、割烹の座敷などの会場で琴や尺八、フルート、和太鼓等、古典の音色を演奏する音と灯りの幻想的なアートプロジェクトである。２日間で１万人を集める、夜の祭りとして開催されている。

Murakami City has retained many distinctive features of a *joka-machi* (towns that lie at the base of Japanese castles) as much of traditional architecture and landscape has remained over the centuries. Facing a wave of urban development, a group of local citizens mobilized to preserve and recreate the traditional landscape of the city. The Kurobei Project is a part of this local effort, in which a team of volunteers transforms the concrete walls of modern houses into the traditional *kurobei* (black wall) style by applying painted lumber over the existing outer walls.

The project—supported by funds collected from local residents who donate 1000 yen (10 dollars) per sheet of lumber—has succeeded in drastically changing the look of streets so that they now retain the characteristics of a *joka-machi*. The team's effort represents an innovative idea that revives the traditional character of the city with relatively minimal cost and time, but with great effect.

## M. クリスト社長の村上訪問と受賞による嬉しい変化

ティファニー財団賞の受賞後、ティファニーのマイケル・クリスト社長が村上にお越し下さいました。マスコミも集まる中、クリスト社長にご参加頂き、小路の一角で、皆で汗をかきながら黒塀づくりをしました。丁度その日は地元の七夕祭りで、山車が出て、獅子舞が行なわれます。黒塀づくり終了後、クリスト社長に浴衣を着せ下駄を履いてもらい、メンバーも全員浴衣姿で集まり、皆で杯を交わし語らい七夕祭りに繰り出しました。村上の伝統文化を堪能してもらい、我々にとってもクリスト社長とのとても楽しい思い出になりました。

権威あるティファニー財団からの評価は、地元からの評価も大きく向上させることになり、非常にありがたいことでした。今まで黒塀づくりの許可をもらえなかった家主から許可をもらえるようになり、受賞当時、340m だった黒塀は現在 420 mに達しました。未来へと継承していこうと我々の士気も高まり、現在は子供達が大勢参加するように変化してきています。かつては誰も通らなかった小路でしたが、今や村上の人気の観光スポットに変化し、地域活性化に大きな役割を果すようになりました。

ティファニー財団賞の受賞は我々メンバーの士気を高めるだけでなく、地元からの活動への高い評価と理解につながっていったのです。頂いた賞を我々の誇りとして心に刻み、黒塀の取り組みを発展させていきたいと思っています。

第３回伝統文化大賞

# 京町屋再生研究会

京都府京都市

*Kyo-machiya Revitalization Study Group*

京都の中心部、祇園祭の山鉾が立ち並ぶ界隈、祇園祭の余韻が残る夕、京町家再生研究会は発足した。平成４年７月17日のことである。バブルと呼ばれる異常な経済状況の中、土地の値段は跳ね上がり、みるみる町家は姿を消していった。このままでは京都の歴史が創り上げてきたまち、伝統的な木造住宅である京町家はなくなってしまうのではないかという危機感が研究会を発足させた。急速に失われていく町家の保全再生を目指して、活動については主に３つのことをテーマとした。

再生実践活動：町家の改修、補修、新たな活用の提案
広報・周知活動：会誌の発行、シンポジウムの企画・運営、見学会等の企画
調査・研究活動：講演会・見学会等の開催、町家の実態調査及び実測、再生の手法研究

研究会の活動の中で一番中心となった再生実践活動については、発足当初より様々な相談が舞い込んだ。建物の維持管理、修理の問題や維持の方法、賃貸借・売買にかかわる問題等についてメンバーが情報を集め、それぞれの知識や経験を活かし対応した。結果いくつかが実を結び、古い町家に新しい血が流れ始めた。伝統の中にあった町家が新しい生き方を見つけたのである。

現在はNPO法人京町家再生研究会、一般社団法人京町家作事組、京町家友の会、京町家情報センターの４組織があり、役割に応じた活動を進めている。「京町家作事組」は、設計者や大工、左官など施工者が主体となった町家改修、補修にかかわる職人集団であり、相談のあった町家に応じたチームをその都度編成し再生に当たっている。「京町家友の会」は、町家の居住者を始め、様々な形で町家にかかわりを持とうとする会員の組織である。京町家に対しての広報や周知活動は現在、この会が中心になって行っている。「京町家情報センター」は、空いている町家の流通を促進し、町家活用をより活発にするため、賃貸借、売買にかかわる活動をしており、不動産の専門家がその職能を活かし、積極的に町家居住の牽引をしている。４会の連絡会議で活動の基本的な理念を確認しあいながら、おのおのの個性を活かした活動を実行している。

*Kyomachiya*, literally "Kyoto townhouses" from the Edo period (1603–1867) for the merchant class, once typified the historic landscape of Kyoto. However, with Japan's post-war economic success, the city's traditional architecture began rapidly disappearing in a wave of modern development. According to a study by the Kyoto Municipal Government, the number of *machiya*-style buildings had fallen to 28,000 by 1998, and every year about 1000 were being torn down.

The Kyo-machiya Revitalization Study Group was formed in 1992 with the mission of preserving Kyoto's historic *machiya* buildings and the traditions that have been associated with them. The group began sponsoring a diverse range of activities, hosting studies, workshops, and symposiums to explore ways to convert *machiya* into functional and safe residences that accommodate contemporary lifestyles; promoting policies that recognize the importance of preserving local culture; and analyzing other models for preservation programs in Japan and abroad.

The group takes a comprehensive approach to preservation of *machiya* as a part of Japan's cultural legacy, focusing not only on protecting the buildings but also more broadly on revitalizing the community as a place where people live, work, and come together. These efforts led to the establishment of several sub-organizations that carry out different activities under the umbrella of Kyo-machiya Revitalization Study Group. First, an organization of craftspeople was established, and it provides technical advice on maintaining and renovating *machiya*. Also, a "Friends of Kyomachiya" group was formed for Kyoto residents who share an interest in *machiya* culture. It organizes concerts, cultural seminars, and tours to promote understanding of *machiya*'s cultural importance. Most recently, in 2002, a Kyomachiya Information Center was opened to deal with the spread of vacant *machiya* houses. The center provides support for those interested in purchasing or renting *machiya* and it distributes information on individual properties and local real estate agents. In addition to finding new *machiya* residents, it also helps *machiya* owners and real estate brokers appreciate the cultural value of the buildings.

As one of the most established groups in the field, the Kyo-machiya Revitalization Study Group has also been actively engaged in networking and exchanges with other organizations working to preserve of traditional cityscapes, inside and outside of Japan.

## さらなる取り組みへのはげみとなった受賞

特定非営利活動法人京町家再生研究会
理事長　小島富佐江

京町家が様々な評価を受けるようになってきました。京都の暮らし、文化を担う存在として光が当たっていますが、研究会発足当初はまだまだ認知度が低く、活動はとても地味なものでした。発足から 18 年、活動は定着してきたもののよりよい活動を進めようと模索していたときに、ティファニー財団賞の伝統文化大賞をいただきました。

京町家再生は京都での取組みではありますが、伝統的な木造の文化は日本全体で考えるべき問題です。当研究会としても全国に呼びかけをし、さらなる広がりとしての連携を進めたいと考え、全国町家再生交流会開催等、各地への呼びかけを積極的に行って、伝統木造に対する認識をより強くしようと努力を続けてきました。ティファニー財団賞という形で、このような活動に対する評価をいただいたことに大変感謝しています。

受賞によって、2 年前にニューヨークで開催したシンポジウムでアメリカの財団とのご縁もいただき、町家が京都、日本のみならず海外の方々からの評価をいただいたことが大きな励みとなり、今日もメンバーが日々町家再生に努力をし続けています。

第３回伝統文化大賞

# 赤煉瓦倶楽部舞鶴

京都府舞鶴市

*Red Brick Club Maizuru*

特定非営利活動法人赤煉瓦倶楽部舞鶴は、1988年、舞鶴市の若手職員による自主研究組織「舞鶴まちづくり推進調査研究会」が発足したことに始まる。研究会で横浜市を視察した際、新港埠頭の赤煉瓦倉庫を活用するパーク計画を知り、「舞鶴の赤煉瓦建物が、まちづくりに生かせるのでは」との想いが芽生え、調査研究を行うこととなった。

当時、舞鶴市では、明治34年開庁の舞鶴海軍鎮守府設置のため建造された赤煉瓦建物が市内に数多く存在したが、かつての戦争遺産として、まちづくりには無縁とタブー視され、市民に見向きもされなかった。

まず、倉庫1棟のライトアップを開始、市民から注目される。次に、市内の赤煉瓦建物の調査（今では130棟余りを確認）を実施しマップを作成したことにより、広く周知されることとなった。

全国の赤煉瓦に縁のある都市に呼びかけ「第1回赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」を盛大に開催したことで、市民参加の機運が一気に高まった。1991年6月には「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」（2000年にNPO法人化）が、また同年10月に全国組織「赤煉瓦ネットワーク」（事務局横浜市）が発足、以後幅広い活動を実施することとなった。

舞鶴市は、これらの市民活動の高まりに注目し、市制施行50周年記念のメイン事業に赤煉瓦建物再生を位置づけた。まず1棟を、赤煉瓦をテーマとした世界に類のない「赤れんが博物館」として1993年にオープンさせた。以後、「智恵蔵」など、赤煉瓦倉庫4棟の再生事業を積極的に推進してきた。20年余の長きに亘った事業が完成し、2012年5月に、「舞鶴赤れんがパーク」としてグランドオープンした。多くの観光客で賑わっている。

これまで、春の大道芸大会、夏のジャズ祭、秋のアート＆クラフトフェア及び冬のライトアートと、四季折々に多彩なイベントを実施してきた成果が実った瞬間であった。

現在は、新たな取り組みとして、市民に知られていない市内の赤煉瓦建物等の見学会と活用提案、他市の近代化産業遺産活用事例の調査研究を行うことに重点を置くなど、今後の面的な観光資源開拓に向けた活動を展開しているところである。

Until the end of World War II, Maizuru served as an important navy port, and this heritage left the town with clusters of red brick buildings that had been used as military warehouses. However, after the war, many of these were left vacant, and they became to be seen as obstacles to development that needed to be razed.

City residents only first began to recognize the potential value of the red brick buildings when a small group of young city hall employees visited Yokohama City, looking for ideas for revitalizing Maizuru. As in Maizuru, Yokohama also had shuttered old warehouses, but they were starting to be recognized as important local assets. Inspired by Yokohama's efforts to preserve and utilize their red brick warehouses, Maizuru officials and residents began a series of activities to highlight the historical importance and architectural beauty of the red brick buildings in their city. In 1991, as a part of this movement, Red Brick Club Maizuru was established to promote red bricks, or "*akarenga*," as a symbol of Maizuru and to make the warehouse district into a center for community activities.

Since 1991, the group has annually hosted "Summer Jazz in Maizuru," which has become one of the highlights of the year in the region. A large audience from around Japan travels to Maizuru for this outside concert, where nationally renowned jazz musicians perform amidst the red brick warehouses. More recently, the group launched a "red brick road" project through which local students and residents excavate historic roadways that had been used to transport red bricks through the town to construct warehouses, bridges, and other structures. In addition to the projects directly organized by the Red Brick Club, local residents, business, and the city government have started organizing a host of related activities around Maizuru that have helped to make the red brick warehouses a center of cultural activities for area residents. A Red Brick Museum was opened in 1993; a vacant warehouse donated by a local business was turned into a cultural center with exhibit, study, and event facilities; and other community events have been launched, including an "Akarenga Festa" arts and food fair and efforts to illuminate the warehouses.

The experience of Maizuru is shared with other communities that have similar red brick structures through the national "Akarenga Network," which was established in 1991 after Maizuru hosted the first national symposium to study the preservation and utilization of red brick buildings. These efforts bore fruit in recent years, and in 2008, seven red brick buildings in Maizuru were designated by the national government as Important Cultural Properties of Japan.

## 新たな目標・第２ステージに

特定非営利活動法人赤煉瓦倶楽部舞鶴
理事長　馬場英男

第３回ティファニー財団賞伝統文化振興賞受賞から、4 年が経過しました。受賞当時は、赤煉瓦倉庫を再生した市政記念館等２棟の指定管理業務を舞鶴市から受託して４年目で、積極的に自主事業等行い来館者を倍増させるなど成果を上げていた時期でした。
しかし、その後の選考において他の団体に指定管理者が決まり、６年間の当法人による指定管理を終えました。
そのため、その後の活動方針を理事会で協議し、第２ステージを目指すことにしました。

赤煉瓦を生かしたまちづくり活動の集大成「舞鶴赤れんがパーク」が、2012 年にグランドオープンしたことで第１ステージを完了とし、第２ステージは、これまで市民に広く知られていない市内に残る赤煉瓦建物等に光を当て活用を促す活動を行うことにしたものです。

すでに活動の成果として、一昨年、明治 34 年建造の旧海軍上水道配水池の初公開を実現させ、市民の多くが見学したことに市が着目し、見学設備を整え常時一般公開が可能となりました。また昨年から、廃校となり長年放置されている市内唯一の木造校舎の保存再生をめざし、舞鶴市、地元住民に働きかけ、現在、清掃、仮修理作業を進めています。

これら法人の活動に要する経費は、ティファニー財団よりいただいた賞金を「赤煉瓦保存基金」に繰入れ、有意義に活用させていただいているのは言うまでもありません。

第４回伝統文化大賞

# あまわり浪漫の会

沖縄県うるま市

*Amawari Roman Association*

あまわり浪漫の会は、沖縄県うるま市の中高校生が参加する舞台現代版組踊「肝高の阿麻和利」を支援することを主な目的に 2001 年 7 月に結成された。舞台づくりを通して、子ども達の感動体験、居場所づくり、ふるさと再発見・子どもと大人が参画する地域おこしを行うことを理念としている。

活動は、勝連城 10 代目城主「阿麻和利」をテーマにした演劇を子ども達が取り組むことで、感動体験の場をつくり、ふるさと再発見、子どもと大人が共同参画による町づくりを目的としており、1999 年に旧勝連町教育委員会が国の補助事業を受託して取り組んできたことに始まる。翌年 3 月に「勝連城跡」での野外公演で初上演された。

2001 年 5 月には、町立公共文化施設「きむたかホール」の完成に伴い、野外公演から会館ホールでの公演に移行。2002 年からは、行政の予算削減に伴い、本会が自主公演を主催・企画運営する体制へと移行した。活動継続に向け紆余曲折もあったが、2014 年で 15 年目を迎えた。この間、公演回数は通算 243 回、観客動員数は延べ 14.8万人にのぼり、参加する子ども達の人数は、当初の2倍以上の200名となっている。

舞台は沖縄の伝統芸能である「組踊」をベースに、現代的な音楽やダンスを取り入れた構成になっており、中学 1 年生から高校 3 年生までが在籍している。この活動が始まるまでの子ども達は、自分の生まれ育ったマチに誇りを持てず、勝連城最後の城主「阿麻和利」に対しても地元の " 英雄 " として、胸を張って誇ることも出来なかった。

しかし、この舞台活動を継続することで、今では「勝連城跡」や「阿麻和利」は地元の誇りであり子ども達の憧れとなっている。そして、中高校生が学校の枠を越えて集い、一つのものを作り上げていく過程で、互いを認め合い、助け合いながら成長していく姿に周りの大人や地域も変わってきた。いまでは舞台活動を通して、子ども達は地元を再発見し、生まれたマチの素晴らしさを学び、それを一所懸命舞台上で表現し発信している。

さらに、県内外や海外から訪れる同世代の子ども達との交流を通して、地域に対する思いの深さや人とのつながりの大切さ、足元を見つめつつ視野を世界に広げることを学んでいる。近年では、舞台鑑賞のためにわざわざ県外からうるま市を訪れる観劇人口が増えており、地域活性化にもつながっている。

The Amawari Roman Association (literally "The Dream of Amawari" Association) supports an annual theatrical production *Kimutaka no Amawari*, put on by more than 150 junior and senior high school students from Uruma City. By relating the local legend of Lord Amawari who ruled Katsuren Castle in the 15th century, this helps build pride among youth in their local heritage and culture, something that is especially important in a rural area where many young adults have been leaving due to limited opportunities. The theatrical program originally started in 1999 as a local government initiative and, later, it grew into a major community project in which students take leadership roles with the support of their parents and other local residents. In 2001, the Amawari Roman Association was created by parents and other community members to support planning and operation of the student theater production.

The production is based on a traditional Okinawan theater style called *kumiodori*, but with the addition of contemporary music and dance. Its high-quality performances attract large crowds from within and outside of the prefecture. The students also have performed nationally through Japan as well as internationally, including a special performance in Hawaii. Through the experience of taking part in the planning and performance of the Kimutaka no Amawari production the students become proud of their cultural heritage, develop connections to their own community, and nurture confidence and self-esteem.

## 勇気づけられた活動評価

あまわり浪漫の会
長谷川　清博

あまわり浪漫の会は、2001 年にティファニー財団賞伝統文化大賞を受賞させて頂きました。授賞式での選考委員の先生方から延べられた受賞ポイントには、たいへん勇気づけられました。

中高校生が、地元の伝承を演劇として復活させ、地域を勇気づけつつ振興に成功したユニークな活動。それを代々受け継ぎ高いレベルで次世代に維持し継承している。中高校生が舞台活動を通して“人づくり”を実践している。地域の新しいアイデンティティーを創造する力となり得ていることや地域に誇りと自信を取り戻すほどの力を発揮し得ている。そこに、学校教育とは異なる意味と価値を発見できる。等それぞれのコメントが活動を継続する自信となっています。

今では、地域のコンテンツとして、本活動が県内外にも認知されるまでになり、同じ理念で活動を共にする団体が各地に増えてきました。受賞から歳月が過ぎていることを受賞時に頂いたトロフィーがいぶし銀色へと変わったことで物語っていますが、本会は、これからも輝き続けていける団体として、肝高（キムタカ：志が高い）をキーワードに地域を誇りに思える心、志高く自己肯定できる“人づくり”に取り組んでいきます。

第４回伝統文化大賞

# 鯛車復活プロジェクト

新潟県新潟市

*Taiguruma Revival Project*

旧巻町の「鯛車」は江戸末期から昭和の中ごろまで、主に籠屋、提灯屋などがお盆のころの副業として制作・販売していた子ども向けの郷土玩具である。しかしながら、時代の変遷とともに人々の心から忘れ去られていった。1970 年代に愛好家が昔を懐かしみ一時復活させたが、その唯一の職人が亡くなると鯛車は完全に姿を消してしまった。

それから十数年後、当時美術系大学の学生が卒業制作として、自身が子どものころに夏祭りで引いた記憶が残る「鯛車」を選び、独学で制作。これをきっかけに市民有志による「鯛車復活プロジェクト」を立ち上げ、巻の鯛車を復活させるための活動を始めた。

巻から「鯛車」が消えてしまった要因を「制作を職人に頼りすぎていたこと」と定義づけ、プロジェクトの活動の基本を「鯛車の作り手を増やすこと」におき、一般市民を対象とした制作教室を継続して行っている。これは、鯛車を作れる人が増えれば、自然と鯛車の数が増え、まちから消えることはないと考えたからである。

プロジェクト主催の教室は、参加者が材料費を負担し、講師は教室を卒業した人たちがボランティアで行うため、経費をかけずに継続することができる。現在は、巻の教室をはじめ、東京・表参道、長野・善光寺など県外でも行うとともに、鯛車の素晴らしさを次世代に伝えるため、小学校でも教室を開催している。

一方で、鯛車の PR 活動も積極的に行っている。毎年、お盆のイベント「鯛の盆」や古い街並みとコラボする「鯛の宵」を初夏と秋に行うほか、県内外のイベントに参加して鯛車の素晴らしさを多くの人々に PR している。

2008 年からは、お盆の墓参りにあわせ鯛車の貸出しを行い（巻では 8 月 13 日の主に夕方から夜に行う）、昔のように子どもたちがロウソクを灯した鯛車を引いて歩く情景が見られるようになってきた。この鯛車の貸出しは大変好評で、年を追うごとに希望者が多くなってきている。

プロジェクトの最終目標は、昔は当たり前だった鯛車が町に溢れるお盆の情景を復活させ巻のまち全体を真っ赤に染めること、そして活動を通じて人と人の繋がりが広がり、心豊かな暮らしを取り戻すことである。

*Taiguruma* (a fish–shaped lantern on wheels) were once a common sight in the town of Maki, where children walked around town pulling the lanterns during the summer. It was a tradition that began in the late Edo period, however, *Taiguruma* completely disappeared from the community by the 1970s.

The Taiguruma Revival Project team is beginning to revive this once-lost tradition after the team leader—a college student at the time—created *taiguruma* for his graduation art project. The group regularly holds classes where local community members learn how to make *taiguruma*. In addition to reintroducing the tradition of children parading around with *taiguruma* to the community, the project also provides an opportunity for old and young generations to interact and strengthen community ties. The *Taiguruma* has now become a symbol of the community, and some businesses even use it as their logo or incorporate it into their merchandise.

## 受賞が与えてくれた、新たな目標

鯛車復活プロジェクト
代表　野口基幸

2011 年にティファニー財団賞伝統文化振興賞を受賞したことは、鯛車復活プロジェクトの参加者、そして地元の巻の人たちに、今まで身近にあった「鯛車」の価値についてもう一度考えるきっかけを与えてくれました。まちの外から評価されたことで自分の住んでいるまちに、こんなにも素晴らしい文化が在ると誇りを持てたことと思います。

そして一番大きかったのは、ティファニー財団賞受賞が新潟市に評価され、同市の姉妹都市である米国テキサス州ガルベストン市との交流を深める核として鯛車が選ばれたことです。2013 年、2014 年とガルベストン市から美術教師をはじめとする友好団を受け入れ、鯛車教室を主体に様々な交流を行いました。また、私たちもガルベストンへ赴き、現地の学校の子どもたちと一緒に鯛車を引いたり、一般市民を対象とした鯛車教室を行ったりして、鯛車の活動を通じて新潟市とガルベストン市の交流を深めることができたと思います。

異国の地でも鯛車のあかりは人々の気持ちを和らげ、人と人を繋ぐ不思議なチカラがあると感じました。ティファニー財団賞の受賞をきっかけに、様々な地域で手作りの鯛車にあかりを灯し、世界平和に繋がる取組みもしていきたいという新しい目標ができました。受賞が私たちの活動にとって大きな転機となり、プロジェクトの広がりをつくっていただいたことに深く感謝しています。

第５回伝統文化大賞

# 公益財団法人 山本能楽堂

大阪府大阪市

*Yamamoto Noh Theater*

山本能楽堂は、大阪城近くに佇む大阪で一番古い能楽堂である。昭和２年に創設されたが戦災により焼失し、昭和 25 年に再建され、現在に至る。平成 18 年には全国の能楽堂として初めて登録有形文化財となった。そして、平成 23 年から３年間、文化庁による初めての「重要建造物等公開活用事業」のモデル事業として大改修が行われた。（株）安井建築設計事務所の設計・管理、graf 服部滋樹氏のデザイン監修により、歴史の陰翳が刻まれた能舞台にモダンな空間が対峙する唯一無二の貴重な建造物として、64 年ぶりに新たな息吹が注ぎ込まれた。

ビジネスの街・大阪にありながら、「本物の日本文化」を体感できる希有な美しい空間へと生まれ変わり、古い建物のよさは保全しながら、耐震補強工事に加え、LED カラー照明の設置、全館床暖房、車椅子対応の客席ならびに多目的トイレの新設等、現代の最新の日本の技術を駆使して機能性を向上させた。また、ライブラリー・資料室を新設し、劇場と研究施設を結ぶ新たな取り組みも開始した。

今回の改修のコンセプトは「開かれた能楽堂」。能楽堂がかつては船場の旦那衆によって「紳士の社交場」として活用されていた歴史を検証し、大人からこども達まで、様々な国籍の、多種多彩な人々が行き交う「現代の社交場」としての可能性にあふれた場所として公開活用を行っている。そして、古い貴重な建物を有効活用し、社会のために多彩な活動を実施することで、地域の住民がシビックプライドを感じ、ランドマークとしての役割を担うことを目標としている。

建物内の能舞台は、客席と舞台との距離が近く、演者の息遣いや汗を感じながら、観客が舞台と一体となって臨場感を持つことができ、ちょうど昔の芝居小屋のような雰囲気をもっている。その利点を活かし、大阪商工会議所、大阪市、大阪観光局の協力を得て、初心者を対象とした古典芸能の普及・啓発活動に積極的に取り組み、能だけではなく大阪で育まれた文楽、上方舞、落語、講談、浪曲等の「上方伝統芸能」全体の情報発信基地・育成機関としての役割も担い、大阪の文化・観光振興に寄与している。

また、次代を担うこども達への能の普及活動にも積極的に取り組み、現代美術家の視点を取り入れながら、「子ども達が自主的に楽しめる」独自のプログラムを多数開催している。同時に、文化庁からの委託により小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等で伝統芸能の授業を実施し、小学校の社会の教科書の表紙や学習のページにもその様子が掲載されている。

*Noh* is the oldest Japanese theatrical art, with a history stretching back more than 650 years. While it is an important part of Japan's cultural heritage, *Noh* is often described as outdated and difficult to understand for contemporary audiences. The Yamamoto Noh Theater was founded in 1927 to preserve and revive this traditional performing art and has undertaken various initiatives to present *Noh* as an "attractive art that lives in the contemporary era." The group takes particular pride in its location, Osaka, which has nurtured many forms of Japanese performing arts, including *kyogen* (traditional comedy theater), *bunraku* (traditional puppet theater), and *rakugo* (comic storytelling). To promote Osaka as a city of traditions, the association regularly hosts events that present *Noh* performances along with other forms of performing arts, giving audiences a comprehensive experience of Osaka's many cultural activities.

The theater is classified as a national heritage site, originally built in 1921 and then reconstructed in 1950 after being burned down during the war. Workshops are regularly held for those who are new to *Noh*, including international audiences. The association also hosts children's programs in which children can learn about *Noh* through creating set pieces, trying out *Noh* choreography, and participating in performances as part of the choir. In recent years, it has produced a new *Noh* program themed around environmental issues in Osaka. While it has retained the quality of traditional *Noh* theatrical performance, the theater also integrates contemporary arts into the stage set and involves children as performers to encourage community

## ティファニーのある能楽堂、その輝きを胸に

公益財団法人山本能楽堂
代表理事　山本章弘
（観世流能楽師・重要無形文化財総合指定保持者）

能楽は650年の歴史を持つ世界最古の仮面劇であり、連綿と続くその歴史の中には日本の美意識が凝縮されています。伝えられ、守られてきた「有形の美」と「無形の美」。日本のあらゆる美の表現が能楽の中には今もなお息づいています。

エレガンスや独自性、完璧なクラフトマンシップに培われたティファニーは、伝統を重んじながらも常に革新的で、世界中の美を融合させ新しい世界を開拓してきました。その魅力は能楽の精神とも響き合い、今回の受賞によって私たちの心の中に深く、新しいクリエイティビティの精神を注いでくれました。それは、ティファニーが育んできた製品の根底に流れる独自の崇高な精神が蓄積され「無形の美」として凝縮されたものであると感じています。

今回の受賞による最大のプレゼントは、このティファニーの精神を私達の活動の中に共有させていただき、進むべき指針をいただいたことです。

受賞を機に、能楽堂の大規模改修をはじめ、私どもを取り巻く環境や、活動は今まで想像すらできなかった状況へと急速に発展することができました。それは、受賞によって新しい価値観が注がれ、気持ちが大きく変化したことによる功績だと思っています。

「無形の美」は人の心から心へと伝承されていきます。これからも「ティファニーのある能楽堂」として、伝統を重んじながらも革新的な精神を大切に、活動を続けていきたいと思っています。

第５回伝統文化大賞

# 特定非営利活動法人 輪島土蔵文化研究会

石川県輪島市

*Wajima Dozo Culture Renovation Center*

2007 年 3 月 25 日に発生した能登半島地震では、数多くの土蔵が損壊した。土蔵の修復に対する公的な補助制度がなく、逆に取り壊しを支援する制度があるため次々に取り壊されていき、その数は輪島市内だけで 1 年間に約 600 棟にのぼった。土蔵は湿度や温度を一定に保ち、埃を遮断する特性に優れているため、輪島塗や日本酒醸造の重要な産業基盤（製造兼保管空間）である。土蔵の消滅は、地場産業の根幹を揺るがすだけでなく、地域の気候風土に合った建物の建築技術が途絶えてしまうことを意味する。

その状況に危機感を募らせた我々市民グループは、土蔵の修復支援による地場産業の復興と建築技術の伝承ならびに新たなまちづくりを目指して、地震の数日後から活動を始め、半年後には NPO 法人を設立し活動を継続している。

土蔵が地震で被災した原因を明らかにし（課題把握）、その技術的な問題を改善し（技術改良）、土蔵修復技術を職人に修得させ（職人育成）、被災前よりも魅力的な街を創出する（拠点創出）、という 4 つの複合型のまちづくり活動を展開してきた。

これまで 7 年間の連続ワークショップ活動を経て、以下のような成果を挙げることができた。我が国を代表する左官職人 久住章氏を総監修に迎え入れ、彼が考案した 4 タイプの「地震に強い土壁構造」を研修できるワークショップを開催した結果、全国から 100 名近い左官職人が輪島まで何度も足を運んだ。

「土蔵修復技術を学ぶのなら輪島へ行け」と言われるまでになった。その研修プログラムを通じて、土壁用の鏝を揃えたり、転職して左官見習いになったりした者が 5 名おり、職人同士のネットワークも拡がった。

修復支援した土蔵は全部で 9 棟を数え、輪島塗ギャラリー、交流サロン、左官技術研修場、セミナーハウスなどのパブリックスペースに生まれ変わった。被災前とは異なる魅力を持ち、土蔵群を見学しながら街歩きを楽しめる新たな滞在型回遊観光への道が開けた。④寄付金を通じて、地場産業生産者とも双方向に「真心のキャッチボール」ができる「土蔵へどうぞ」という新たな寄付システムを構築し、実績を挙げることができた。

A *dozo* is one of Japan's traditional architectural structures, which was used during the Edo Period (1603–1868) to store valuable commodities ranging from rice to gunpowder. In Wajima, known for its lacquerware, the *dozo* also provided excellent space for craftsmen to work with lacquer that requires consistent temperature and humidity. In the aftermath of the 2007 earthquake in Wajima, the government's reconstruction plan led to the destruction of the damaged *dozo* due to safety concerns as well as the lack of comprehensive support measures for restoring historical structures such as the *dozo*. As a result, nearly 600 of them disappeared from Wajima's landscape within a year. In response, the Wajima Dozo Culture Renovation Center initiated a laborious project to preserve the local history by repairing the damaged *dozo*. Moreover, the group has innovatively utilized *dozo* as community centers for educational events and concerts, as well as venues for displaying Wajima's own extraordinary lacquerware culture. The organization has also initiated a training program for younger builders to acquire the specific expertise needed to repair the *dozo*. The research center's initiatives successfully made *dozo* into accessible spaces for local residents to actively appreciate the region's traditional inheritance.

## 左官技術への確信と若手職人への明るい灯

特定非営利活動法人輪島土蔵文化研究会
理事長　水野雅男

「我々の活動は世界水準」ティファニー財団賞の連絡を受けたときにそう感じました。この活動を始めてから数多くの左官に出会い、土壁を塗り上げる左官職人の鏝さばきに魅了されました。竹小舞をかき、荒壁、むら直し、中塗り、漆喰仕上げなど、数多くの工程と時間を経て造り上げていく技術力、そして土壁の精緻さと美しさは世界屈指のものです。世界に誇れる左官職人の技を途絶えさせない、新たな担い手を育成するのが我々のミッション。しかも、地震などの自然災害大国日本において、修復技術を継承することは 21 世紀社会においてなくてはならないものです。

「世界水準の左官技術を伝承していることが、ティファニーの企業精神に通ずる」これまでワークショップに参加された職人やボランティア、活動を資金面で支援くださった方々など約 1,000 名の活動仲間にとって、大きな誇りと確信となりました。受賞のニュースは、地元輪島市民だけでなく、国内の地域づくり関係者にも広く知れ渡ることとなりました。さらに、左官技術や左官職人にも光が当たり、若手職人に明るい希望を抱かせるものとなりました。精神的に大きな後押しをいただいたことに感謝し、これからも一歩ずつ活動を続けていこうと思います。

第６回伝統文化大賞

# 本杉通り振興会

石川県七尾市

*Association for the Promotion of Ipponsugi Street*

一本杉通り振興会は、石川県七尾市の中心市街地に位置し、44 の商店等で構成された商店街団体である。商店街としての歴史は古く、長く能登地方随一の賑わいを誇った商店街であったが、道路網の整備や大型郊外店の進出などにより、全国の商店街同様、客足が奪われ廃業する店舗が後をたたず賑わいを失いつつあった。そんななか、再び商店街の賑わいを取り戻そうと取り組んだのが「花嫁のれん展」である。

花嫁のれんとは、幕末期より加賀藩直轄地であった加賀、能登、越中地方だけに伝えられてきた婚礼道具の一つである。婚礼時、花嫁は、持参してきた花嫁のれんを婚家の仏間前に掛け、潜ったあと仏壇にお参りする儀式に使われるが、あとは二度と使われることはなく、箪笥の奥にしまわれてきた。

振興会では、地域固有の資源であること、加賀友禅で染められ華燭であること、二枚と同じ絵柄がなく一枚一枚に嫁がせる親の思いと嫁ぐ娘の思いが込められていることなどに着目し、平成 16 年より「花嫁のれん展」を開催してきた。商店や住家が一つになり、450m の通りをギャラリーとし、訪れる見学者に商店主やおかみが語り部として花嫁のれんに纏わる物語を語る取り組みは好評であり、2014 年、11 回目の「花嫁のれん展」を開催したが、石川県はもとより、全国から多くの見学者が訪れるイベントに成長した。

このような取り組みにより、一本杉通り商店街の知名度が上がったこともあり、イベント期間だけではなく、一年を通して観光客が訪れるようになった。商店主は、「花嫁のれん展」の語りの経験を活かし、地域の歴史文化や生活文化などを語る「語り部処」の設置や商店に関係する体験処を設置し、観光客に楽しんでもらう取り組みを行っている。

地域固有資源である花嫁のれんを核とした商店街の賑わいづくりの活動は、七尾市によって、平成 28 年春完成を目指した花嫁のれん常設展示場建設へと動き始めている。

*Noren* curtains are the long curtains that sometimes hang in the entrances to restaurants and traditional Japanese rooms. In Nanao City, Ishikawa Prefecture, the local tradition of *hanayome noren* (bride's *noren*) dates back to the Edo Period, according to which a special *noren* is made for a bride using the traditional *kaga yuzen* technique. The *noren* is hung in the doorway that leads to the *butsuma* (a small room or vestibule that holds sacred objects) for the bride to walk through, a ritual that symbolizes that the bride is welcomed into her new family. The tradition continues today, and beautiful *noren* are still made for brides, but they are often stored away without much appreciation outside of the family.

Ipponsugi Street is a commercial district in the city of Nanao that is known for its traditional Japanese products. The Association for the Promotion of Ipponsugi Street organizes an annual exhibition displaying *hanayome noren* in local stores and residences, which has grown into a major event that attracts large crowds. Every year, around Mother's Day, approximately 50 businesses and homes on Ipponsugi-dori Street display nearly 150 *hanayome noren*. The event opens with a traditional bridal procession, and "story telling booths" are set up and staffed with residents that introduce local culture and lifestyles. The town also publishes pamphlets that relate residents' stories about their hanayome noren. In 2007, a special exhibition of *hanayome noren* was also held in the city of Nagoya.

有坪井外商店

## 新たな発展へのいしずえ

一本杉通り振興会
会長　鳥居正子

年々寂れていく商店街を何とかしたいとの思いから、商店主が一つになって始めた「花嫁のれん展」が10回目を数えるのをきっかけに、駄目だろうという思いで応募したティファニー財団賞でしたが、まさかの伝統文化大賞の受賞は驚きでいっぱいでした。七尾市や石川県の応援をいただき出席したニューヨーク本社での授賞式で、地域から全国へ、そして世界へと花嫁のれんが歩き出す一歩にしたいと感じました。「伝統文化と現代社会」をテーマとした財団賞がなくなることは残念ですが、最後の授賞団体として、ティファニー財団賞に恥じない活動を今後も続けて欲しいとのメッセージだと思っています。
地域に引継がれてきた伝統文化を守りながら、振興会の活動を続けていくためには、次の世代につなげていくことが大事だと思っています。授賞をきっかけに、若い世代の方々も積極的に活動に参加するようになってきました。新たな発展へのいしずえをつくってくれたのがティファニー財団賞でした。

第６回伝統文化大賞

# ENVISI

宮城県仙台市

*ENVISI*

ENVISI（エンビジ）は、アーティスティックな力でコミュニティの再生力を高めるために活動するアート系まちづくり団体である。アートプロデューサーの吉川由美とアーティスト、市民有志が中心となり、各地の人々とともにアートプロジェクトを通して、まちの目に見えない価値を見出し、人と人との間に見えない絆をつなぎ、新たな活力を生み出すことを目的に活動している。

団体名は、「想像する・思いを巡らす」という意味の ENVISION（エンビジョン）から命名した。地域毎の固有の伝統、生活文化、風習、生業などに目を向け、そこに潜む唯一無二の価値を、住民自らが再発見する機会をつくり出し、それを大切に思いながら、未来を創る新たな力に変換していくためのプロジェクトを宮城県内各地で展開してきた。その活動を“生きる博覧会”と名付け、2009 年鳴子温泉郷、2010 年南三陸町でアートプロジェクトを開催した。

南三陸町で 2010 年から行っているのは、きりこプロジェクト。宮城県北部では、正月になると多くの家の神棚に、切り紙が飾られる。特に沿岸部の南三陸町では、神社毎に宮司たちが連綿と美しい切り紙の伝統を継承してきた。漁業を生業とするこの地域では、投網に魚・扇などの縁起物を一枚の半紙から切り透かす複雑な意匠の御幣や、お神酒・巾着などの縁起物を切り透かす、通称「きりこ」が民家の神棚を彩ってきた。

南三陸町の女性有志とともに、活気を失いつつあった中心市街地の歴史や人々のエピソードを掘り起こして、街を回遊する楽しみを創出しようと、南三陸町志津川地区の目抜き通りの店や家を訪ね、それぞれの宝物や思い出、歴史を取材。「きりこ」の意匠の美しさに着目し、その様式を模倣。家々の物語を表した絵柄を切り透かして「物語きりこ」を作り、約 650 枚を軒先に飾り付けた。これまでは見えなかった家々の物語が可視化された。また、自らの生活の中に生きて来た「きりこ」の美しさを再発見することにもなった。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災で南三陸町の町が流失。2010 年にプロジェクトで関わった地区は跡形もなく失われた。しかし、すべてを失った人々の心には記憶という宝物が生きている。アイデンティティを失うことなく、魂のこもった唯一無二の南三陸町を再生することができるように、ENVISI は町の人々とともに、「きりこプロジェクト」を継続している。

ENVISI has been engaged in various art projects in Minamisanriku to revitalize the community since 2009. The most notable event was the "*kiriko*" exhibit, which came about in collaboration with local residents. *Kiriko* is a paper-cutting craft that applies unique techniques and designs that are passed down as a tradition in local shrines. In the exhibit, *kiriko* artwork was displayed in front of shops and houses on the main street that stretches out from the train station. The project inspired local residents and helped them appreciate what their community could offer. Their activities came to have even more significance after Minamisanriku was hit by the devastating earthquake and tsunami in March 2011. As one of the hardest-hit areas, the town lost 70 percent of its buildings and many of its residents. ENVISI resumed its work soon after the disaster, first by distributing food and other emergency supplies.

Today the group is engaged in various art projects to support the people of Minamisanriku. One such project is another *kiriko* exhibit, in which artists interview local residents about their memories, experiences, and hopes, and design *kiriko* to tell their stories. The organization is also engaged in children's projects, working with local schools and hosting workshops in which children create their own songs to tell their stories.

## 見えないものを見つめ続ける

ENVISI
代表　吉川由美

青空をバックに白い切り紙が軒先に揺れていた2010年の夏の風景が、私たちの脳裏に焼き付いています。650枚の「きりこ」を飾った家々に、それぞれの暮らしや歴史がありました。その町のすべては、無残にも一瞬のうちに失われました。それは、精神文化やアイデンティティの危機でもありました。

私たちは、人々の心の中に生きている記憶、誇り、アイデンティティを支えるべく、大切な人や家財を失いながらも、復興のために懸命に生きる人々の姿を「きりこ」と短いメッセージの看板に表し、家々が流失した跡地に掲げたのです。宮司さんたちが連綿と時を超えて伝えてこられた神棚飾りの美しさに敬意を表しながら、笑顔を絶やすことなく力を合わせて困難を乗り越えようとする人々の姿を讃え、共有しようと思ったのです。

ティファニー財団賞受賞は、記憶や文化という目には見えないものこそ、被災地の復興に不可欠であることを、町のみなさんと確かめ合う機会をくれました。「魂」のこもった復興のあり方について、改めて本受賞は世に問いかけたのです。

生き生きとした地域を再生するには、見えないものを見出し続けることこそが重要です。忘れてはならないことに、多くの人々の目を向けさせてくれたこの受賞に、心から感謝申し上げます。

今年の夏も、私たちは町のみなさんとともに南三陸町の人々の姿を物語る「きりこ」を作り続けていきます。

**ティファニー財団賞の輝き**

2015 年 2 月発行

著者　（公財）日本国際交流センター
発行所　（公財）日本国際交流センター
〒 106-0047　東京都港区南麻布 4-9-17
TEL　03 － 3446 － 7781　FAX　03-3443-7580
表紙デザイン　ティファニー財団賞トロフィー
（デザイン：パトリック石山）
印刷・製本　（有）山崎印刷
レイアウト　パトリック石山

The Radiance of Tiffany Foundation Award
Copyright @ 2015 by Japan Center for International Exchange
Printed in Japan
ISBN　978-4-88907-141-2c

ISBN 978-4-88907-141-2
90000 >
EAN
9 784889 071412